

「岡谷元治教授停年退職記念」号 の刊行に際して

岡谷元治先生は、昭和50年2月14日で停年に達し、3月31日に退職された。ここに、同志社大学経済学会は、先生の在職中の貢献をたたえ、それを記念するため、同僚と後輩が論文を集めて刊行し、謹んで先生にささげる。

先生が同志社にはじめて奉職されたのは、昭和21年であったから、以来約30年の長きにわたって勤続されたわけである。それは、同志社の戦後史を身をもって生きてこられたことを意味する。

かえりみれば、まことに多難の30年であった。

同志社が建学の基盤とするキリスト教主義は、戦後社会の自由化のなかで混乱におちいり、キリスト教主義的教育とは何かを常に問い求めながら、その内実がどうあるべきかについて、合意がないままの状態が続いてきた。

また、高等教育にかんする戦後の学制改革は、同志社においても大幅の編成がえと新制度の発足をもたらした。その波を先生がもろにかぶられたことは、外事専門学校から短期大学部へ、さらに経済学部へと、同志社のなかで移籍を重ねてこられた先生自身の履歴が、よくそれを物語っている。

さらに、多人数教育の問題が、そこへ加わった。多数の学生を迎え入れねばならなかった理由や、その是非をここでは問うまい。大学が自治を旗印にかかげるかぎり、それはまず大学の構成員が解決にあたるべきことであり、職務に良心的であればあるほど、重く肩にのしかかってくる性質のものであった。

そういう環境のもとで、約30年間にもわたって忠実に職務を果たし続けられたのは、なみなみならぬことであつたらう、と思われる。先生の永年勤続に対し、私は深く敬意をあらわすとともに、心よりその労をねぎらいたい。

先生は多くの面で大学に貢献されたけれども、とくに印象的なのは、学生に

対する個別指導を重視し、実践されたことである。先生は自分の研究室のとびらを常に学生のために開いて、懇切に対応し、指導された。先生はいつも学生とともにあり、先生の研究室からは快い師弟の語らいと笑いが洩れていた。

それは言うは易く行ない難いことである。その教育実践によって、少なからざる学生が密度の高い指導をうけえたこと、また私ども後進の実践にすぐれた導きをあたえてくださったことに対し、深い感謝をささげたい。

先生の健康と平安を祈りつつ

昭和50 (1975) 年5月2日

経済学部長 古 米 淑 郎 するす